

東日本大震災と「封印された死」

～改めて問われる
自死遺族の人権問題～奈良女子大学名誉教授
放送大学客員教授しみず しんじ
清水 新一さん

危機時によみがえる社会の不備、欠陥

2011年、本当にいろいろなことがありました。とりわけ東日本大震災は、普段私たちが日常の中で忘れていたこと、気付かなかったことなどを改めて突きつけることになりました。阪神淡路大震災のときにも言われたことですが、こうした壊滅的な危機にさらされて見えてくるものに社会システムないしは社会の仕組みの不備、脆さといったものがあります。

あの阪神高速道路が橋脚ごと折れ崩れてしまった写真は、未だに強烈な驚きとともに私の中に刻印されています。そしてこの度は、三陸の港街を守ってきた頑強な防潮堤を、あまりにもやすやすと越えて襲う累々としたどす黒い海のうねり。そして一夜明けて私たちが目にした光景は、壊滅した街とその残骸に絡みつくような漂流物や瓦礫の山でした。これらは私たちの生活を支えていた便利で快適な安全神話があまりにも脆いことを、そしてあまりにも迂闊にこのことを特段意識せずに暮らしてきた私たちの日常性を鮮烈に示す象徴的な出来事にほかなりません。

今回の被災は自死問題についても、危機に直面して普段意識することなく暮らしてきた私たちの日常を揺さぶるものとして立ち現われました。東北に限らず日本のあちこちから、次のような声が、聞こえてきます。震災後、自死のことを語りにくくなったという内容です。どういうことかといいますと、最愛の大切な人を失う深い悲嘆と自分が何もできなかった無力感の体験は自死遺族の場合と変わらない。とはいえ、それでも死への願望は言うまでもなくいのちを絶つまでに追い込まれた状況にもない

ままに、あたら元気で希望に満ちた命までをも引き波にさらわれてしまった被災遺族にとっては、自らのいのちを終えた自死遺族の場合とはやはり少し違うという思いと感覚です。そしてその感覚を背後で支えている死をめぐる価値観です。具体的にいえば、故人の無念さならびに被災遺族の悲しみと苦悩を思うと、大切ないのちを自ら放棄してしまうのはあまりにももったいないとの社会的感覚です。このことによって、自死遺族は自分たちの喪失体験に関わる悲嘆や無力感といった、最近になってようやく社会的に語ることが可能になり始めた感情的苦悩を口にすることがなにか憚られるように感じ始めているのです。

“悲しみくらべ”

この問題に触れることはある種の危うさと微妙な事柄が絡んでいます。ですから、そう単純な判断や主張は慎むべきでしょう。すなわち、グリーンケアなどの現場でいわれる“悲しみくらべ”の問題性とも相通じるからです。“悲しみくらべ”とは、死別のつらさ、悲しさのほどを比べてどちらが大変かを思い、時にわかちあいの場で言葉にするような行動を指します。病死であれ事故死や災害死であれ自死であれ、辛い別れでこころを痛めた者同士が、どちらのほうが辛い体験だと口にしてもなんの利もありません。むしろ害ばかりが残るのです。“悲しみくらべ”という表現は、そしてこれを諫めることはさまざまな別れの体験を濾過して染み出てきた人知の結晶でもあるのです。

しかしながらそれでも、この問題に触れねばならないと感じています。なぜならば、自死遺族が震災

遺族や被災という現実にとどこか遠慮し肩身の狭い思いをしているような傾向が目立ち始めているからです。大震災後自死遺族の直面する“古くて新しい”苦境、つまり先にふれたように自死遺族としての自分たちの生きにくさ、自責や孤立といった感情的苦悩を口にするのがなにか憚られるように感じ始めているからです。

自死に対する偏見と「封印された死」

すさまじい被災の現実ならびに被災遺族の悲嘆と苦悩を目の当たりにして、そしておそらくそれにもかかわらず「がんばれニッポン」の体現例などを見聞きするなかで、少なからず自死遺族は改めて自分たちの無力感や自責感を強めたことでしょう。

遺族が自死についてもっと自由に語りたと思って、それがなかなか難しい現実があります。一般の死とは違って自死はゴシップの種であり、遺族も周囲も表だって語ることが強く憚られます。「どうやら自殺らしい…」と陰で語られる性質を付与され、遺族は悲しみや苦悩を自然な形で周囲に吐露することもできません。会葬者に自死であったことを告げるにどれだけの勇気が要求されることでしょうか。自死の事実を公表したとしても、孤立感やいろいろな辛い体験を背負うだけの厳しい現実があります。その結果、もう決して人には話すまい、ただ自分の心の奥に封印しておこうと、自死の事実と自分の感情を押し殺すようになります。むしろ自死の事実を家族にさえ隠そうとする遺族の多いのが現実です。これを私は「封印された死」と呼んできました。

ただ遺族が他人に知られたくないから隠すのだろうという見方は、半分はそのとおりで半分はそうではありません。知られたくない半分の事実の背後には、自死に対する社会的な非難、つき放したような冷淡なまなざしが、それも個人的には容易にあらがえない強大な社会の壁として存在するからです。「弱かったからだろう」「無責任に逃げて勝手に死んだ」「いのちを粗末にした」等々。しかし自死遺族は大切な人の死因を好き好んで偽っているのではないのです。自死だと明らかにすれば、周囲や社会がどのように反応するかがある程度読めるからです。これが「半分はそうでない」理由です。一方、「半分はその通り」であるのは、こうした自死に対する厳しい批判的な見方は自死遺族自身が実は自死が生じる前の昨日まで社会と共有していた価値観でもあるからです。自死遺族の立場となっても、社会の一構成員として自らの内部に深く刻印して

きた自死に対する批判的な、時に偏見といってもよい見かたはそう簡単に払しょくされません。それほどに自死に対する厳しい見方、偏見は根深いものがあります。これが社会的に「封印された死」としての自死の実態です。

平時には潜在化していた死因をめぐる社会的な価値観、見方が大震災という社会的危機のただ中に再び立ち現われ、しかもそれをいち早く敏感に察知した結果が、震災によって被災者遺族が多く発生した状況で自死遺族は以前にもまして自死のことを語りにくくなったという状況でしょう。おそらくこれは、変則的ながら自死遺族自身による“悲しみくらべ”の結果の肩身の狭さだと私は理解しています。自死遺族が自ら先んじて“悲しみくらべ”をしてしまう、そしてその結果自ら肩身の狭さと戸惑いを感じてしまう。この構図こそが問題ではないでしょうか。

死因による差別と人権

既に触れたように、自死に対する強大な社会の壁を前に口をつぐんでしまう、代わりに家族にさえも死因を偽って口にする自死遺族の苦境を「封印された死」と呼びますが、「死因による差別」と表現をする人もいます。大切な人との別れをきちんと悲しむ、それも周囲の人と一緒にその悲しみをわかち合うという、いわば喪の情緒的作業を個人としても社会的にも十分に進められない自死遺族が多くいます。一方、自死現場の原状回復を法外な形で求められ泣き寝入りしたり、家族の自死によって就職や縁談が壊れてしまったりという目に見える実害も報告されています。こうした社会的な非公正を除去しようとの趣旨の運動も一部で起きています。また自死と自死遺族の尊厳回復を図るための立法化に向けた署名活動の動きも認められます。このような考え方や動きを踏まえて、最近では自死と自死遺族の問題を人権という観点から捉えなおす動きも明確な流れとして立ちあがってきました。

最後に、自死ならびに自死遺族の問題が人権の問題としてとらえなおされる理由を端的に示す次のような問いかけをして終わらしましょう。

封印された死。なぜこの封印を解除して死者に誠実であろうとすることが、この社会では理解されずに冷やかに見られるのか。自分自身と故人を嘘で固めた人生に閉じ込めることなく、なぜ自分自身と故人に誠実であろうと生きていくことが妨げられ、難しくなるのだろうか。